



2020年 ねずみ年

子

丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥



子(ねずみ)年の 干支の意味

子年は新しい物事や運気のサイクルが始まる年になるといわれています。植物が循環する様子を表している十二支の1番目に「子」がきているように、子年を植物にたとえると新しい生命が種子の中にぎざし始める時期で、新しい物事や運気のサイクルが始まる年になると考えられています。また、ねずみは「ねずみ算」と言う言葉があるほど、子どもをどんどん産んで数を増やしていることから「子孫繁栄」の象徴でもあります。

子の方位は、北

子の刻は、深夜0時を中心とする
約2時間(23時~1時頃)

子の月は、旧暦11月

字の成り立ち
「子(ねずみ)」という字は、
頭部の大きな幼児の形からきた
象形文字です。

ネズミが、十二支の中で一番なわけは？

昔々、ある時神様が動物たちに御触れを出しました。「元日の朝、私のところへ出掛けてきなさい。最初に到着したものを、1年交代でその年の大将にしてあげよう」動物たちは、我こそが1番になるぞとはりきっておりました。

足の遅いウシは、誰よりも早く夜明け前に出発しました。すると、牛小屋の天井でこれを見ていたネズミが、こっそりウシの背中に飛び乗りました。そんなこととは知らないウシが神様の家に行ってみると、まだ誰も来ておらず門も閉まったまま。我こそが1番だとウシは喜び、門が開くのを待っていました。やがて朝がきて門が開いたとたん、ウシの背中からネズミが飛び降り、ネズミが1番となりました。

ちなみに十二支に「猫」が含まれていないのは、ネズミが猫に対して門の前に集まる日を1日遅く伝え、1日遅れで出かけたネコは番外となり、それ以来ネズミを怒って追いまわすようになったそうです。

2020年は、「庚子(かのえね)」

干支とは「十干」と「十二支」の組み合わせ
12で一回りとする十二支(じゅうにし)
10で一回りとする十干(じっかん)を合わせたものです
十干

「甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸」

十二支

「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」

十干最初の「甲」と十二支の最初の「子」を組み合わせた「甲子(きのえね)」から最後の「癸亥(みずのとい)」までに、その数は実に60種類にのぼります。

高校野球でおなじみの「甲子園」は、球場が完成した1924年が奇しくも十干十二支のそれぞれ最初の「甲」と「子」が60年ぶりに巡り合う年だったため、その縁起の良さにあやかっけて名付けられたといえます。

